

## 枅型本『阿仏の文』(広本) 解題・翻刻

幾 浦 裕 之

『阿仏の文』は、『乳母のふみ』『庭の訓』とも呼ばれている。広本

は、弘長三年(文永元年(一二六三)四)頃の執筆で、阿仏が為家と同居する際、内侍として宮仕えしている娘に宛てて、女房生活の心得を認めたものである。この個人的消息を一般的な手引き書とするべく、後人の手で事項を整理、抄出したものが略本と考えられる<sup>(1)</sup>。鎌倉期の『源氏物語』享受の様相を伝え、当時の女房の実態を知る上でも貴重である。略本は国文学研究資料館蔵『為家乃御前阿仏のふみ』(タ五―一二八)ほか、多数伝存する。広本は『群書類従』巻第四百七十七所収の『乳母のふみ』(屋代弘賢蔵本に拠る)、内閣文庫蔵の天明元年坊城俊親奥書本『めのとの文』(一九〇―二五二)、現存最古本の善本と目される陽明文庫本『阿ふつの文』(慶長から寛永ごろ写)<sup>(2)</sup>の三本しか知られていなかった。本稿で紹介する新出の『阿仏の文』(個人蔵)は広本の一本で、寛文八年の校合奥書を持ち、現存諸本の中で、陽明文庫本に次いで古い伝本である。本文は内閣文庫本にやや近い。

枅型本『阿仏の文』(広本) 解題・翻刻(幾浦)

### 書誌

外題・内題なし。後補白色布目地表紙。とじ糸後補。見返し本文共紙、斐紙。列帖装一帖。前後遊紙二丁ずつ、墨付三十六丁、一折十枚。縦一五・七糎、横一七・一糎の枅型本。一面十一行、字高約二三・五糎。三七ウの本文最終行「あなかしこ」の上に摺り消し痕がある。三八ウ左下に小さく「寛文八季/十二五於灯下一校畢」と、親本との確認作業をしたとみられる校合奥書がある。紅葉・笹・唐草文・浮線綾文の刷り模様の入った上質な紙に能書の手で本文を書す。親本の改行を遵守して書写したためか、しばしば行末が分かち書きになる。

料紙の豪華さと書写の丁寧さに比べて表紙は簡素である。余白が広すぎることも勘案すると、若い女性のために書写されたが何らかの事情で製本を途絶し、仮綴のまま表紙をつけられずにあつたのを後人が簡略な表紙をつけ、糸綴をし、列帖装として完成させたとみられる。

### 凡例

翻刻は底本の誤写と考えられる箇所そのまま翻字し、(ママ)で

示した。読解の便宜のため濁点を加え、句読点を施し、会話などには「」を付した。反復記号「、」「く」は、原則として底本のままとしたが、濁点は付した。漢字の反復記号「々」は「々々」を用いた。

築瀬一雄編『校註阿佛尼全集 増補版』（風間書房、一九八一年）の「庭の訓（廣本）」の章段番号を【】で示した。底本には以下の箇所にて脱文とみられる箇所がある。脱文を（ ）に同書の本文で示す。15ウ「ゐんの御前にて（弾かせおはしまし、又八の御歳と覺え候に）春宮の」、27ウ「うちかすめもして、（折々につけて、端無き事も）ありながら」。

翻刻

【一】（2オ）なにはのこのよしあしをも、おぼしめしわき候はんまでは、うきをも忍びすぐして御身をさらぬまもりにとこそ思ひまいらせ候つるに、おのが世々にも成ぬべく候ことの、さやはちぎりしとおきふしなげかれ候に、御ふみ見候へば、いさめし物とみえさぶらふこそあはれに覚候へ。げにさぞおぼしめし候らんと、御心ぐるしうて、ちかきほどの思ひやりだになく、都鳥にことゝふたよりも候はぬ身の、（2ウ）帰る浪をのみうらやみて、くもでに思ふことたえぬ八はしの名もうらめしく、わたりもやられ候まじき心のうちに、又おぼしめしなげ候はんずるほどを思ひつゞけ候へば、いとゞ物うくて、大かたいかにも、みそぢにあまりてこそうるはしく物は思ひしられ候なれ。はたとせがうちは、猶おもひさだまらぬ事にて候なるを、ましていかにと御心ぐるしく候へども、いくとせつもりたらん人より

も（3オ）おとなしく見まいらせ候ほどに、よろづをほしめしわく候こともやとて、御らむじとゞむるふしゞもやと、こまかに申候なり。

【二】らうたくうつくしき人のそのかたちのう世にならびなく候も、心さだまらずなど候へばいたづらごとにて候。御心にこゝろをそへていかにあらまほしく覺しめす御こと有とも、をのづから人もり聞て、もどきそしりぬべからんことは、御心にこゝろをからかひて、覺しめしわすれ候へ。（3ウ）心のまゝなるが、返々あしきことにて候。たとへひとのいみじうつらき御事候とも、色に出て人に見えむは、はづかしかりぬべきことゝおぼしめして、さらぬかほにてはありながら、さすがにそやとはおぼえて、ことずくななるやうに御もてなし候へ。又うれしう御心にあふこと候とも、こと葉に「うれしや、ありがたや。」などおほせごとあるまじく候。うきもつらきもうれしきも、御心によく覺しめし（4オ）わき候はゞみえ候はんぞ、又人の心のうちなどをとこそありけれ。「かゝる心のして。」など人にもおほせられ、さたする事あるまじく候。御心のうちばかりにて、よく覺しめしとゞめ候へ。我御身のうゑをも、ひとの事をも、おほろけの人のうちかたらひ、色見ゆる御ことなど候はで、大かたに何ごとをも、御心のうちばかりにおぼしめしわき候へ。あさはかに物などおほせられ候はんは、あしき事にて候ぞ。さればとてあまりに上ず（4ウ）びて、にくいげしたるもわろく候へば、そのほどはわかまへふるまはせ給ひ候へ。何よりも心みじかく、ひきゝりなるが、あなづらはしくわろき事にて候。なかゞと何事もあるやうあらんずらんと思ひのどめたる

が、なだらかによく候。さればとて、大やけわたくしにつけて、いそぐべからんことを、いふかゝなくて月日を、くり、時をうつされ候はんは、わるく候。人にもうちたのまれ、御こと葉をもませたらん事をば、(5才)きはぐ、しうすゑとをるやうに、はかなからんことをも、我御身の手をもふれ、いろびた、せ給ひ候べく候。かく申候へばとて、にくいげしてさし過、さかぐしうをもだつさまの御もてなしは、ゆめく候べからず候。たゞおいらかにうつくしき御さまながら、よしあしを御覽じとゞめて、ことよく申よらむ人にも、おほるけにて御心うつさず、またけにくうもてはなれなどせで、大かたにつけては、人をばはぐ、みなさけあるやうに(5ウ)あはれむは、よき事にて候。とめるをば人ごとにうらやみ、おもくするならひにて候。まことにそのほどもいかでなくては候べきなれども、御心のうちには、まづしきをあはれなる物にかずまへおもふが、ほんたひにて候。たとへば人のうへをそしりにくみなどして、忍ぶ事をいひあらはし、うちさゞめきなど、かたへの人の候はんに、露ばかりもことばませさせをはしまし候まじく候。あやまりて「人は何とか申つる、いかゞ。」などた(6才)づねまいらすること候とも、「いさ何とやらん、あらぬ事をいひしほどに、きかず成にけり。」など、はかなげにおほせられなして、ことざまなる御あひしらひ候べく候。

【三】人になさけをかけ、あはれかはすさまの御心むけはあるべく候。しる人ごとにいたづらなるすゝろふみしげかきかはす事、よからぬことにて候。なべてひとにくからぬもてなしにて、さる物から、

とりわきうちとけたるむつごとの、心よせある御しる人には、おほろけならず、(6ウ)ゑらみて覚しめしかはすべく候。人の心ほどうちとけにくうおそろしき物は候はぬぞ。何のみちに車をくだし、なにの海に舟をうかめたらんよりもと、ふるくも申ならはして候へば、よくくやうある事とおぼえ候ぞ。返々御心え候べく候。我めしつかふ人々の中にも、おとなしくもありぬべからんには、物をもおほせられあはせ、うちたのむやうにあたらせ給ひなどして、わがうさいとなからんには、たゞいまにくからぬやうにおほし(7才)めし候とも、ひたひさしあはせて、御きそくよげにうちさゝやき、たはぶれかはしなどするも、かろぐしくあなづらはしきことにて候。さやうの御わきまへは、さりともと、御心やすく思参せて候へども、わかきほどの心は、おもふにつけて、人のもてなしによることも候へば、猶うしろめたきやうにて、これまで申候。

【四】又、御心むけはさる事にて、はかなきわざにもとりふれさせ給候はんずる物ごとに、よしあるさまにと覚しめし候へ。さす(7ウ)がに上のしなのえらびに成ぬる人の、すたれうたであることは候まじけれども、おなじこともあるにまかせて、心をそへぬやうに候へば、びさうなき物にて候。そのみすのまへはくるしきやうに、そのわたりは心にく、など、心ときめさせらるゝやうに候へば、人にも所おかれ、はぢらるゝことにて候ぞかし。

【五】御たき物などはせられ候はんにも、かきませのつらにはあらず、しみふかくめづらしきにほひをそへて、人の御ほどをしはから

る、やうにと覺し（8オ）めし候へ。ことぐしく、けはやきかほりなども出て、このましくするていには候はで、たゞいつもうちとけず、御ぞのほひもなつかしきやうにしましてわたらせたまひ候へ。ひとのたき物こい參せ候はんに、かうぐと、のはず、おもひいたるすぢなきやうに候はんなど、ちらさせ給候まじく候。「その人のほひはべちの物にて」といはる、やうに、何事もなべてのつらにはあらじと覺しめし候へ。

【六】さればとて、我こそはとにくいげして、人（8ウ）のことをもどくやうになどは候はで、うらくとなにのすぢあるさまにはみえぬ物から、心の中にはうつくしく何ごともはへある色をそへてしがなとおぼしめし候へ。大かたの御もてなしけはひも、いとをしきすぢをそへて、さぶらふ人々にも、あさぐしくみだれたるふりなく、よいあるやうに御をし候へ。さるかたにおかしきけて色をもかをもはへぐしく、しるさまにみせ、いまめかしう花やかなるふるまひは、一どはさる（9オ）かたにかひある心ちし候へども、二たび返見候へば、いかにぞや、みおとりせぬやうは候はぬぞ。さるべきいらへ、おりふしのなさけ、いたくむもれ、いぶせて、ふるぎのかはぎぬに、くちおほひたるやうなどこそくちをしかりぬべく候へ。「こはえもいはぬ。」などやうにいらへぬべからんごたちをば、わきてらうたき物にせさせ給へ。ほどしらぬおもひなきも、むげなる事にて候へば、我こゝろひとついかに思ひおきて候へども、すゑぎ（9ウ）まにいふかひなく、はぢをもしらぬていなる人だに候へば、我めのとをりならぬ

ことは、あやまりおほき事にて候。この人はことの外ならじと、すこし心ばせありて御覽せむ人をば、せうくはなんあることありとも覺しめし候へて、いとをしくもせさせ給へ。さのみ思ふやうなることは、かたかるべければなど、よろづを御心え候へ。ひとのかほぐにいで入、「いま、いりの、此たびのはまさりたる、おとりたる。」といひさたせらるゝは、返々（10オ）あさぐしく、心にくからぬやうに候なり。おぼろけにては、日比より、そのたれがしなど人にもしられ、あひしられつけたるていにて、としごろに成たらむ人をば、いださせ給候まじきにて候。それもやうにこそより候はんずれ。心ながきやうをたてゝも、人になんぜられ、かたへの人のためにも、たへがたきことなどの候はんは、又まんに候へてもあしく候へば、人のほど心のきはぐをよく御らんじて、御はからひ候べく候。

【七】又、人の（10ウ）すがたもてなしなどは、むまれつきたる事にては候へども、それもさすがに、心むけにより候へば、ほのかならんうしろでをも、こはぐしからぬやうに、みさほにもてなさは、よろしくは、なかみえざらんとおぼえ候。ひぢのかゝりもてすくみ、なますゝろきはぐ、何と申にもおよび候はず。たゞなべてよき程に、人とうらくとむかひて、御かほのおきどころつしやかに、すがたうつくしくいなして、水どりのうきたるさまおぼえて、（11オ）御袖のおきやう思はず、心をそへて、木丁のはづれゆかしきさまにもてなして、御くしのかゝりもおほどかにすたれぬさまながら、あまりよしありとわざとめかしからぬやうに、はづかしきかたをそへて、おほ

どこかよういくはへて、御ふるまひ候へ。うちさうどきあいぎやうづき、にぎは、しくなどあるまじく候。かく申候へばとて、さるべき人のまいりて候はんずるに、神さび物とをくてかすが野の雪の朝、加茂のやしろの河かみ(11ウ)など覚えたるやうには候まじく候。たゞ御もてなしばかりの、おもりかにあさはかならぬすぢのありたく候。わざとも人をわかず、なつかしき御人さまにてありたく候。人のきはぐをおほしめしわくべく候。ひとにむかひて、なにのすぢともなき物がたりして、代つぎが世よりこの御代までのこと葉もつゝかず、時よもしらぬいたづら物がたりなど仰られ候まじく候。みすのきわちかくいよりてたれがかうむりのひたいつき、くつ(12オ)のおとなど申てわらふ人の候はんに、ゆめゆめこと葉ませせ給候まじく候。すべて人のとしのほどよりもおとなしく、およずけたるがよく候。人にいみやうつけなどしてわらひ、心しれるどちめみあはせて、人のあまねくしらぬほどの事うちわらひ、「そ、や。」などさ、やきて、をのづから「なぞや。」などとふ人あれば、「たゞさることの。」など、て、けしきはみたること、返々くちをしきことにて候なり。

【八】花月などいかにぞやあることの候ぞ。(12ウ)な御覽じそにては候はぬ。きげんによりたる物にて候。わかきほどに、またいたくおよずけたるにもくき事にて候。あまりにふようめきたるもわるく候へば、をくれすぎぬほどにわたらせをはしまし候へ。人まるあか人があとをもたづね、むらさきしきぶが石山の波にうかべるかけをみて、うき舟の君ののりの師にあふまでこそかたくとも、月の色花のほひ

もおほしとゞめて、むもれ、いふかひなき御さまならで、(13オ)かまへて歌よませをはしまし候へ。哥のすがたありさまは、みなふるきにみえて、くでんにしるして候へば、よく御らんじ候へ。たゞ女の哥には、ことぐしきすがた候はで、詞たがはず、いとをしきさま、うらくとありたく候。さればとて、えんあるすがたにのみ引とられて、たましみの候はぬもわるく候へば、さやうの事は、猶々ふるきを御覽候へ。いかにも哥をばこのみて、しうにいらせ給ひ候へ。なにわざもこの世のたはぶれにてこそ候へ。命たへぬれば(13ウ)みなむかしがたりにて候。歌はすべらぎの御代のつきし候まじく候へば、かしこき君にも、その跡としられ、御覽ぜられ、家くのもてあそびにもあはれ成けるわざかなと、忍ばれさせ給候べきことにて候はんずれば、いかほども御このみ候へ。「何事もいけるほどこそせんなれ。この世をわかれんのちは、いかでも。」と申人の候。よにひがごと、覚え候。ほねをばうづむとも、名をばうづまじと申事の候へば、今のなげきよりもまさりて、心うかる(14オ)べきこと、覚しめし候へ。

【九】御手など、かまへてくうつくしくか、せ給ひ候へ。手のすぢは、心くこのみ、おりにしたがつことにて候へば、ともかくもさだめ申がたう覚え候。女のほんたいに、手はとをかたちにて、はかなき筆のすさみも、人のほどをしはかられ、心のきはもみゆることにて候。おきもの、御づしの御さうしなど給て、か、せ給ふほどにと覚しめし候へ。まなは女のこのむまじきことにて候なれども、もじやう、(14ウ)歌の題につけて、さかさ(よ)ましらぬほどならんは、おこがまし

候。御覧じしりて、筆のすきみにか、せおはしまし候べく候。すみつき筆のながれ、よるのつるにこまかに申げに候。御らむ候へ。

【一〇】又、ゑはわざとたてたる御のうまでこそ候はずとも、人のかたちなどうつくしくかきならひて、物がたりゑなど詞めづらしくつくり出てもたせおはしまし候へ。大かた、ゑとても、かたくな、らぬほどにかきならひて、御びやうぶの（15才）すみかき、しきしなどをか、せをはしましたらんこそよき御ことにて候へども、それまでおよび候はずばの事にて候。

【一一】御ことびわなどは、えたる御のうにて候ぬべければ、心やすく候へども、候物ぐさげならんおりも、ねんじてそこをきはめんと覚しめし候へ。わごんもよろづのもの、ねにたて、と覚しめさずとも、つるでして、すこしならひとらせ給ひ候べく候。されど、それは、まねぶ人かたきことに成ぬれば、たゞ（15才）しやうのことをとりわきてあはれに、をもしき物のねにて、五の御としより、ならはしそめまいらせて候しに、ふしぎなるまで御きりやうさどく、いみじき人々にも、おとるまじくなどほめられさせをはしまし候しに、七つにて御いま、いりの夜、ゐんの御前にて、春宮の御びわに引合まいらせなど、名をあげさせ給候し御ことにて候へば、いかにもはげませたまひて、上ずの名をもゑんと覚しめし候へ。

【一二】さる（16才）べき物がたりども、源氏おほえさせ給はざらんは、むげなることにて候。かきあつめて参せ候て候へば、ことさらかたみとも覚しめし、よくく御らんじて、源氏をば、なんぎもくろ

くなどまでこまかにさたすべき物にて候へば、おほめかしからぬほどに御覧じあきらめ候へば、なんぎもくろくおなじくこからびつに入て参せ候。古今しん古今など上下の哥、空にみな覚えたきことにて候。もしや覚えさせをはしますとて、おし（16才）てす、めまいらせ候へども、世に御心にいらす、物ぐさげに覚しめして候し、返々ほるな候。

【一三】おなじ宮つかへをして、人にたちまじり候へども、我身のきりやうにしたがひて、かしこき君にも覚しめしゆるされ、かたへの人にも所をかるる物にて候。おもてをさらし、人によしあしきたせられたるばかりにて、なにの思ひ出としも候はず。おやの心ざしひとつに、いだしたて候へども、させる所なきつらにて、はかなきこと、いらへなどにつけて（17才）もくちをしき、はにてやみ候はんこと、返々心うき事にて候。みめかたちもさることにて、まめやかに、人は心おきてなだらかに、のうなど候へば、うゑにも、さるかたのめやすき物に思はれまいらせ、とうれいの中にも、「これは何もじぞ。そのおりのことはいか成けるぞ。」などていし事を、人のとひかくるほどの事、いふかひなからぬほどに、うちあひしらひ候へば、あなづらはしからず。さるかたにて、たよりなげに、人わらはれなるべきまじらひのさまなれど、ゆるさる、（17才）かたありて、人くしき数に在ることにて候。まどのうちひとつにかしづかれて、おやのをきてにしたがひて世をすぐすほどは、おほくのとももてかくされてやす候。ふるくもこれていし事は申て候やうに、かたはなるべきことは

ひきかくし、世にもれ聞えてよかるべきことをば、ことごとくしくまねびたてなどし候へば、心にく、候を、つねならぬ世のならひ、さてしもありはつるやう候はず。たのめし松もかれはて、下葉かれ行くれ竹の、(18才)をのが世々にわかれぬるのちは、よるべなう心ほそき物にて候につきては、人にもあさはかに思ひおとしめられ、心より外に、かるくしき名もれぬべきことにて候。御身にちかく候はん人の、よからんにつけても、うき名をもながし、そしりをもおいぬべきことにて候。たかきまじらいにつけては、ことにしなぐわきたる心おきてのあらまほしく候ぞ。御てうどごも、あるべきさまにて、みだりがはしからず。わきていみじからぬ物成とも、うたてげに(18ウ)とりなすこと候はで、心ばかりにもと、のへ、はかなうもてならずあふぎのひとつも、み所あるやうにしてもたせ給ひ候べく候。中くにごきは、しくゆたかなる人のあたりは、よのき、にもてなされて、なんにも覚えぬことありげに候。その御身などには、けぢめありぬべく候へば、ことにふれ、すたれず、なさけふかきやうによういして、その人のまへは心にく、などいはれさせ給ひ候べく候。かく申候へばとてよろづにそみ返り、物めでするさま(19才)にもて出で、ゑんある気色ありさま人にみえんなどは、覚しめし候まじく候。花はなどあいきやうづき、けぢかきもてなしの過候ぬれば、何わざにつけても、なむになることにて候。

【一四】月も、秋のさやかなるかげよりも、冬霜夜にさへわたりて、こほりにまがふ色は、心にしめられ、春の花、秋の紅葉のはへぐし

き色よりも、霜がれのせんぎいの、そこはかとなくかれ行て、誰にとはまし秋の名残をと、さながら雪の下にうづもれて、心ぐるし(19ウ)げなるかれ野などの、わきてあはれに覚え候心ならひに、花の色、秋のもみち葉をも、人にたがひてすさめたる御気色みえさせ給はずとも、ことにふれて、けはやからず、物あはれなるかたに御心とめて、このませをはしまし候へと思ひまいらせ候。物く色あひもはれぐとうつくしく、たつ田姫のにしきをそめかさね、はなのたもとをたちそへ、にぎは、しく、「あなげざやか。」など、「めにたつていには。」とて、うはべはおりにつけ、時にしたがつやうに候とも、(20才)御心の中には、物さび、あひなきかたによりて、おほどかなるさまを、しめさせ給ひ候べく候。人の心のきは、たはぶれごと、なをざりの詞にみゆる物にて候ぞ。うへには何ともなきやうにふるまひなして、上ずめかしう人をあざむくていにみえぬ物から、心のそこには、ひととをりを思ひこめて、はじめよりすへのことまでたがへず、物をもおほせられ候へ。うすきをこくいひなし、おろかなるをふかきにいひなして、さしもやはおほゆることに、(20ウ)色をそへて申なすことも、返々わろき物にて候。たゞ何ごともいつはりかざらず、げにとおほゆるやうに候へば、かひくしからず候へど、ものしてはよく候ぞ。大かたに人をもうらなくうちたのみ、なつかしきさまにみせて、なごりなくうちとけさせ給ひ候まじく候。さのみ又、われきもありがほに、さかしばみ、にくいげしたるもてなしなどは、いさ、かも候まじく候。

【二五】人にはこからず、したしからず、いつもけぢめみえぬやうにふるませおはしませ。何と申ても、(21オ)人のしたぢによることにて候。又あぢなき夢の世にたのしみさかへても、いつまでか候はん。つゝには仏のたねとこそ思ひいるべきことにて候へども、おろかなる心のおこがましさは、うへをきはめたるくらゐにもそなはり、ひのものとのおやともあふがれさせ給ひ候はんこそ、かりのこの世にもなぐさむかたには候べきを、その思ひ出なくば、後の世にはくらき道にまよはん事、かなしく候ぞかし。ほうのひきくはかぎりあることにて、何とあてがひ、(21ウ)思ふにもよらぬならひにて候へども、まだしきに、身をもてけちなども、しかるべからぬことにて、ことにも過てやむごとなかるべきと、まづたてたるすぢひとつわたらせ給ひ候へ。かいろうわうの后とかや、あぢむきけん人の心ちして、そのまねめかしく候へども、かひなき心ざしひとつには上が上にもいつきすへて、みまいらせ候ばやと思ふすぢふかく候に、その心をたがへじと覚しめし候へ。(22オ)我身の人数にて、世にたちめぐるかひも候はゞ、心のかぎりかしづきたて、御くわほうのほどをもみまいらせ候なまし。

【二六】宮づかへなど心ぐるしく、あはつけき名もれぬべきわざとみ候しほどに、いわけなき御ほどより、さまでいとなみ、いつしかといだしたてまいらせ候べきにては候はざりしかども、身のいふかひなきやうに候へば、山がつになしはてまいらせ候はんよりは、おのづ

から世にまじらひ、人めかせをはしまさばと思ひたてたるをり、ひとつに(22ウ)あながちに心づよくおぼしめし候へ。二葉よりいそぎたてまいらせ候御みやづかへも、うはのそらにおもふところなきにては候はず。その御身いまだむまれさせ給候はず候しほどに、あやしうたのもしき夢をみて候しも、かならず女にて、かたじけなきくらゐに、世をてらすさまに、さやかにみえさせ給候し。それにつけては、すこしそねみきしろふかたもやあらむなどまで、くわしく候し。いかさまにも、やむごとなきくらゐにと、うたがひあるまじき(23オ)よし、あはせ候しのちも、なをく心ふかき夢のつげどもかさなりて候は、かすがの神もさだめていつはり申すとは覚しめし候はじ。御心にもおぼしめしあはせ候はんずらむたのもしきは、いまだ忘れ候はず。この夢あはんまで、人にかたらず、ふかくおさめて、朝におき夕べにふしても、神仏にいのり申ことをこたり候はず。いまぞかばかりもらしめ候ぬる。我御心にもかけて、をしなべたるきはには、身をもてなさじ。さるべきすくせありてこそ、(23ウ)夢のつげもありけめ。さるにつけては、おほけなくとも、たのもしかるべきをと覚しめして、物うくなど候とも、心ながくしばしは世を御覧候へ。それも又思ふにたがふ事にて候はゞ、いく世もあるまじき世中に、此たびしやうじをはなれ、ぼだひにおもむかはやと、うるはしく覚しめしとるかた候て、御心もしづまり候はゞ、御かたちもかへ、まことの道にいらせ給へ候へ。いかで人なみにもと思ひをきてしま、にもたがひはてぬ。なきおやのくらき道(24オ)にまよはんひかりにも、いかであきらけきみの



りのそこをならひとらむと覚しめし候へ。思ひの外に、もし御身にあらまる御くわほうひらくるほどに候はんは、申におよび候はず。御もちるも何事も、おろかなるふしおほくとも、人にもてなされて、とがはかくる、物にて候へども、それにつけてこそ、よのすゑまでいみじかりしためしといひつたへられたきことにて候へ。

【一七】かしこきひじりの御代より、女御後の御うへまで、よつぎにみえて候へば、よく御らんぜ(24ウ)られ候へ。三でうの後の御もてなしぞ、かたはらいたき事ながら、すゑの世まであらまほしく、いみじき御ふるまひにて候。御心もちる、世のおきて、ふるきをあらため、むらかみの御代よりこのかた、御らんじ覚て、しよくしやたちびゞしきたわいにはあらぬ物から、ふしごとにゆへをそへ、思ふ所あるがよき事にて候。いまやうの人は、はらはれもどかる、かたも候はんずれば、心えて、よきほどにこのあはひは御はからひあるべきにて候。うちまかせさ(25オ)いはひなどひきいづる人は、すくなき事にて候。さすがにをしなべてのつらに、ちと御めかけられまいらせなごするほどのことは、又もる、もありがたき事にて候へども、そのなかにも、すこし御心とめられたるとだに思ひおこり候へば、したりがほにくいげして、人にそしりもどかる、ことのみ候。げにも又すこし色かはり、あぢきなきおもひもそひぬれば、かけまくもかたじけなき御事などを、引ならしがほにうらみまいらせ(25ウ)などして、かぎりある大やけごとにも、さはりと申、世のおほえありがほに、あまたの御つかひをも、かさねてこそなどおもむけたる人、返々あるまじう、

びんなかるべきことにて候。我き、ありがほにほこり、にぎは、しくもわろく候。それていにもむけたる人は、露のたがひめにも、いちはやう思ひしほれて、さとがちに、あはつけき名をもたち、あしきことにて候。「あらあぢきな、御心なぐさめさせ給へ。」などそ、のかず人あればとてかく思しづまんも(26オ)よしなし。げに時々はつみかるむわざもしてしがななどいひて、物まうでをし、おのづからかるびたるありきなどして、人におとしめらる、ふしもまじりぬべし。さやうにて、さしもふか、らざらむ御心ざしなどは、わざとなくとも、ただへゆきて、なごりなきさまに成はつることもや。はじめよりあながちにはへぐしき御覚えならずとも、心もちるおだしくて、人とあらしひぬべからん(26ウ)ほどは、よろづをしらずがほにうらなうらたきさまして、さる物から、身のありさまは、ふかく思ひ入たるやうにうちとけみだれ、心ゆるびたる気色など御らんぜられず、ことをつまごことには、物思はしきを思ひいれず、うちまぎらはすほど、覚えて、さるべきおりりの御いらへはさやかならぬ物から、うちかすめて、詞おほくながぐとことつげぬやうに、思ひしりけりとは、さすがに色みゆるていに、何のあはれをもおもひしりたる色みえて、あはれなる(27オ)べきふしも思ひとめず。「そこはかとなき身のほどにて。」など、ほのかにほめかせ給ふとも、ことに出て、かほの色かはり、物うらめしげなる色あらはさず、人わらはれに、ほいなきことありとも、心のうちふかくしづめて、数なるまじきみの、なを

かくてもまじらふこそ、めやすからめなど覚しめして、うへの女房たちなどにも、身のありさまをかきくづし、ほゐなうおもはずなるよし、露ばかりもおほせられ候べからず。あやまりて「ほゐなきことかな。」、ど（27ウ）申候はん人候とも、何かは人々しく、その数に覚しめざるべきにもあらず。しひて「心のみこそ。」など、詞すくなにてわたらせ給へ候へ。たゞかきませの人々ならで、おもふどちならん人などの心ばせも、なつかしばみ候はんには、それも又うらなきやうにうちかすめもして、ありながら、よろづをしらずがほにてながらふるも、心あさけれど、また「二葉よりはなれざりし御かげのなつかしさに。」などていにかどくしう物うらみがほにはなくて、うちかたらふ（28オ）つゐなどには、もらしもせさせ給候へ。さとずみしげく出いるにつけても、なか／＼身のはぢあらはるゝやうに候へば、いとゞかさおつることにて候。たゞおいらかに心しづかなるふるまひにて、人よりはもてつけ、おさまりたる所たび候へば、うち／＼の覚え、はなやかならねども、しぜんに御らんじなれて、たちまへば、世のたとへに申たるやうに、心ながきはとり所にて、宮たちなど出きさせ給ふほどの事など候へば、その御かしづきにまぎれても、命のきは、すぐすことにて候。

【一八】（28ウ）身のほども世のありさまも思ふやうならぬ事にて候とも、五とせ六とせのほどは忍びて、色かはらぬやうにてさぶらはせ給ひ候へ。猶うき身のすくせとも思ひしりぬべくならせ給候はん時は、一すぢにおもひさだめて、さるべきつゐでして、さまうちかへて、

しづかに覚しめし候へ。よからぬ人は、やがてかきませのきはに身をもてなして、あは／＼しくはふるゝことなどの候。返々くちをしきことにて候。さやうの御心むけはあるまじく候。夢の世など（29オ）申なして、心もちゐあさ／＼しき人の何事もしかるべきこと、申て、よからぬすぢにはかろらかに、物に心えたるさまして、身をやすらかにもてなし、「しなをくれたるまどのうちにも、にぎは、しくてだにかしづきすへられ候へば、心にうれふることなくてありなんかし。」など申なす事にて候。ゆめ／＼その御心づかひ候まじく候。さやうに物を思ひはじめ候ぬれば、おちぶれ、身をもてはふらかし候ぞ。たゞおやのおもかけのこるらん家のうちに、（29ウ）まことにだいかたぶき、すだれたへても、むぐらにかどをとぢられ、のきのよもぎにうづもれて、たれふみわくる跡もなき、庭のあさぢをながめても、むかしにかはらぬ月かげばかりこそこと、ひくるかたにて、たれはぐゝみ、あはれをかはす人候はずとも、仏の御をしへのまゝにて、あきらかなるみちの光をも見、おやのあり所をもしらばやと覚しめし候へ。物がたりにつけたるしるべ、もしはさぶらふるごたちの中にも、あな心ぐるしの御ありさまや、（30オ）かくてはいいかゞすぐさせ給はんぞ。「かれはいづくにをはしましてこそかしこきことはあなれ。これはとしてこそ身をもていで、中／＼にめやすきていなれ。」など申きかせいざなひまいらせ候人候共、なびかせ給ひ候な。げに、それをさるまじきと申にては候はず。木草もちぎりおきたる色々候へば、御ゑんもありこそし候らめども、うきは身にそふならひの候へば、こゝをさり、かし

こへゆきても、人こそかはり、所ぞあらたまり候とも、さるべしとさだめおきなん身のすくせ、一たんのこと(30ウ)によるべしとは覚え候はねば、たゞ御身をわづらはであるにまかせて御らん候へ。あらぬ所をゆかしうする心は、人のおちくだるゐんゑんにて候。むかしのかげとゞまれるまきのはしらはなつかしく、こゝながらこそかたちもかへ、きやう仏の御かざりをも、身のたへんにしたがひてこそいとままめ。おこがましく、うゑなきくらゐにも、いつきかしづきてみはやと思ひたりしおやのおきてにもたがひはて、かくうかりける身のはてを何ごとにつけても、ち(31オ)やくしむさばるおもひなくて、そむくとならば、露もこの世に御心とゞめじとふかくいとひすてさせをしまし候へ。身をかへても、人たてまいらせんと心にたしなみ候へる御心ざしのほど、覚しめしやり候へ。おろかに、すたれぬべからん御心をもはげまして、いかでさやかならん道の光にもならまし。ながらへてあらましかば、かゝるありさまをみて、いかに心ぐるしく、こほりにむせぶしたおぎの袖のしづくをも思はましなど、のどかに覚しめし(31ウ)つゞけて候はゞ、さりとも、御心をすゝむるたよりにはなり候はんずらん。おのづからみまいらせ候はん人など、「かくまではいかにおぼしめしすてける世にか。」などやうに、申人候はゞ、「あまりにつみふかくむまれたる身の、うかぶかたやあるとて。」とばかりおほせられて、いみじくさとりひらけたるさまなどもてなさせ給ひ候まじく候。

【二九】又いかなるひじり、世に聞えたかくて、かしこきありと申

とも、むつびよりて、ほうもんきかんなど、なれちかづく御こと、返々あるま(32オ)じく候。中々思ひよるほどのことかは、など申人候はんは、ひがごとにて候。さやうの事によりて、あしきこと、わるき名もたつことにて候。あるまじきことは、いかほどもうとゞしく、思ひへだりたるが、よひことにて候。ちからなくうけたもたせ給ふべきのりのこと葉、ごぜうの法名もあきらめたく覚しめさば、うるはしき仏の御まへにて、御じゆかひなど、人あまたさぶらはせて、うけもたもたせ給候べく候。世にかしこきあまたちなどのこの比はゆるされ(32ウ)あまた候へば、それも心のほどなどよく御らんじさだめて、御がくもんなどの師にはせさせ給候へ。かりそめにも、「このひじりこそかの御きゑそう。」など、人にははれさせ給候まじく候。仏事などせさせ給候はんにも、人ひとりをおかずあまねき御心にそむゑんに、心ぐるしく候はんあたりをしりて、まことに仏の御心にかなひぬべきやうにせさせ給ひ候べく候。うわべばかりの事はわるく候也。おなじことも、まことをいたし、心ざしをいたさぬは、名のみありて、まこと(33オ)にはいたらぬことにて候也。又きゑんまちくゝなる事にて候へば、人のおしへにもよるまじく候へども、「いづれもおなじ御ほうにてこそ候へ。」など、て、あれこれにかゝりたち候へば、心もちりて、一すぢにそまぬ物にて候ぞ。かまへてくゝ一かたに覚しめしさだめ候へ。ゆるがず、たちろがず、御心を、こさせ給ひ候へ。さればとて、「わがしうばかりほうはありて、世のけうはいたづらごとぞ。」などていの事をろんじて、おとしめなどすることは、返々ある

まじきことにて候。(33ウ) 世をもそしらず、我しうをもいかに人申そしるとも、それによりて、あやぶきたがふ御心候まじく候。

【二〇】思ひ出候にしたがひて、よろづのことを申つゝけ候へば、おなじこともおほく、御覽じにく、も候らん。申てもく、この世後の世にも、心のすゑとをり、おもりに、まことある人がよく候へば、人のうへを御覽じても、よからんにつけあしからんにつけ、御心つくべき物にて候。朝夕そはせ給候はん人にも、心のきはみえて、あらけうざめなど思はるゝていの御ふるまひあるまじく候。(34オ) 中くよその人は、さのみ入たちてのことを、いかでかしり候はん。身にちかくめきもならべたる人、めしつかふ物どもなどのみまいらせ候はん事は、みな世にちらんずると覺しめし候へ。うとかが物をもらすことのやうに、これは我うちの物なれば、よもいひちらさじ、とておこがましきことはいでき候也。人のきゝにくさこそまさり候へども、かくれあることは候はぬ成。世にありわびたらん人のよるべなかつたゞよひ候はんをば、あはれをかけてはぐ、ませ給候へ。思ひのほかなる(34ウ) ことにて、中比世にふるたつきもすたれ、したしきにもそむけられ、うときにもましてこと、ふかたなう成たること候しを、はぐ、みまいらせし心ぐるしきは、おほふばかりの袖も引たらず。それに付ても、かたくなしきかしづき草にいたはしく、あらきかぜをも、よるのふすまをかさねて衣のうすきをふせぎ、いづみの水をすましても、あふぎのかぜのぬるきを心ぐるしく、朝におきては花のひらけたる心ちして、木だかきかけを心もとなくまち、(35オ) 夕べにふしては露の

ちりをもすへじと、とこなつの花のほひにも過て、らうたくまはり、むば玉のかみのすぢごとに千いろをいわひてもあかぬ心ちして、春のにしきも、秋のたつたひめも、我子のためにたちかさねんことを思ひ、まだひとへなる袖のうた、ね心ぐるしくて、さむき夜にもゆかをあたゝめて、かたはらにふせまいらせ、雪のひかりをかべにそむけるひかりとたのみて、あかすよなくおほく候しにも、めにみえぬ神仏をかこち、いにしへのむく(35ウ) ひをうらみて、二とせばかりをすぐして候し程に、心をくだき身もなやみて、おいさきとをき御ためとのみ、よろづにいのりしに、さやは仏の御ちかひむなく候べきと、すぐごうのつたなきみを返りみず、大ぐわんを、こして、一たびはうらみ、一たびはたのもしくぬかをつき、きやうをよみて一すぢにせめふせ申侍しに、みつとまでは候はぬとも、仏の御しるしにやと覺ゆることのみ候へば、いかにもして、御しんづよくねんじまいらせて、もし思ふやうなる世を待出させ給候はゞ、(36オ) ひとのうれへをやすめ、まづしからん物をたすけんと覺しめし候へ。申てもく、たゞ夢の世にて候に、あぢきなきまうねんなくて、仏の御おきて御ようい候べく候。

【二一】かやうの事申候へば、返々おこがましく、おち、りたらむためも、かたはらいたく候へども、せめての御心ざしのあまりに、たちはなれまいらせ候はん世のおぼつかなきに、これをやがてわかれのはじめにてもや候らん。しらぬ世にて候へば、その詞とも覺しめし出候ばかりと、おろかなる筆にまかせ候も、ま(36ウ) づかきつゞき涙

におぼれて、何事を申候やらん。かきもらしたることもおほく、おかしきことも候らん。それに付ても、御覽せんたびごとに、あはれと覺しめし候へ。いたづらごと、覺候へども、いさごの中にも玉は一つかならずゆられてある物にて候。此ふみの中にも、おのづから御覽とますることも候はゞ、かならず御よふにたち候はんずるぞ。さてもくおさなくより法文の師とたのみたる人の候しに、久しくかやうの事もうけ給候はねば、にごりにしづみて、みな(37オ)忘れて候と申て候しに、「庭草はけづれども、たへぬ物にて候ぞかし。ともの宮つこのあさぎよめいそがしくのみつとめ候やうに、あくごうのつもりたらんをつねにはらはんと覺しめして、五ぢよくあくせの我ら、けうまんけだひの心しきりにおこり候へば、庭草のやうにたねをたへぬ物にて候へども、たかきふしぎのぐわんは、あさぎよめするとも宮つこまで、つねにさたし、おこたりなく念仏だに申候へば、わうじやううたがひなくおほ(37ウ)しめし候へ。」と申され候し、げにもとたのもしく、うれしく候。いづれのほうも、詞こそたがひ候へども、此心はしきりにうとくへだ、りやすく、わろき心はず、みちかづきたがる物にて候を、我心ながらもつねにざんげして、心を、しへ行候へば、しだひにたてなをさる、物にて候。わが心のま、にふるまひ候はんには、いたづらごとにて候。かゝることはりとはしりて、人ごとにまよふ事にて候。よくく御こゝろへ候て御れうけん候べく候。

あなかしこ。

注1)

岩佐美代子「『乳母のふみ』考」(『国文鶴見』第26号、一九九一年一月)『宮廷女流文学読解考 中世編』(笠間書院、一九九九年)。

(2)

田淵句美子「『紫式部日記』消息部分再考―『阿仏の文』から―」(『國語と國文學』第85―12号、二〇〇八年二月)。

(付記)

書誌に関して慶應義塾大学斯道文庫の佐々木孝浩教授のご教示を得ました。深謝申し上げます。